

中国雲南省チベット自治州の山旅

--- 歴史の旧街と秘境山岳地 ---
(2007年1月の記録)

高田忠雄

日程：2007年1月2日(火)～1月11日(木)(10日間)

参加者：高田良一、高田忠雄

チベット地方へは行きたいと思っていたので、中国を良く知る高田良一さんに話していたのが今回実現した。昨年11月～12月の期間「もし行けたら～」と、計画のメールをもらってからNHKの世界文化遺産の番組やインターネットの情報を見るたびに興味が増していたが、良さんの休暇の調整がつかず「今回は中止」。諦めていたところ突然「1月2日からなら行けるが～」とメールがあり、私には「いいお年玉」となった。

今回の目的は以下のとおりであった。

- 1) 世界文化遺産歴史の街「麗江」、桃源郷「シャングリラ(香格里拉)」さらに北部の徳欽訪問
- 2) 三峰雪山の「梅里雪山・玉龍雪山・白馬雪山」を真近に観る。
- 3) 4,000～5,000メートル級を2～3座登る(標高差700～1,100メートル)
- 4) 登山家、孔雲峰さんなどと交流し中国の登山情報を得る〔良さんの友人松山峰子(中国名、陳淋)さんの計らいによる。〕

1月2日(火)晴

関西空港 --- 昆明空港 --- (タクシー) --- 昆明市街ホテル(標高1,900メートル)

関西空港で、そば大盛りと生ビールで安全祈願。14時からの搭乗検査もスムーズに終わり16時10分フライト。機体は中国東方航空とJALが共同運航するボーイング社製の中型機だが空席がありゆったりしていた。飲み物はワイン(赤白)サービスがお替りできた。良さんに雲南省チベット情報を聞きながら20時15分(時差マイナス1時間)昆明空港着。職員が少なく狭くて、うす暗い。入国審査をスムーズに終え、ロビーに出ると次々に「タクシー? ホテル? ツアー?」とつきまとわれた。

外に出ると、さすがに道路も空間も広くて市街へのシャトルバスが見つからず、タクシーに乗った。中国のタクシーは基本的にメーター制だが、日本のように正確かはちょっと疑問である。突然ホテル前で停車。「違う! 市街へ」と言ったものの、時間と明日の出発を考えてホテルの値段交渉、旧館ならツイン部屋150円で交渉成立。私達には贅沢過ぎる部屋で第一夜を過ごせた。

1月3日(水)晴

昆明空港 --- 麗江空港 --- (バス) --- 麗江新市街 --- (バス) --- シャングリラ(香格里拉)
--- 新市街民宿(標高3,300メートル)

5時起床。タクシーで昆明空港へ。7時フライト。乗客たった10人。7時40分麗江空港着。ここもうす暗く、人も少なく検査も簡単。8時新市街へのシャトルバスに乗車(15元)。高速道路を快適に走る。正面に朝日に赤く染まった玉龍雪山(5,596メートル)が、岩峰鋭く輝いていた。「うわぁ～凄い!」

広大な畑と農村から、次第に新市街に入り広い道路、ビル、マンション、商店、バスターミナル

も新しくあちこち工事中もあり、新しい場所にきれいな街が作られていた。中国政府の開放「西部大開発」高度成長政策を觀た気がした。9時シャングリラ行の高速バスに乗り換え(45元)。古い家の農村を幾つか通り過ぎ約2時間走ったところで停車休憩。女性達が露店で蒸かした、じゃが芋、さつま芋、トウモロコシ、饅頭、果物類を売っていた。どれも1~2元。熱々で美味かった。

出発すると山岳地帯に入り、周囲の景色はだんだん厳しくなり、世界で最も深いといわれる渓谷(深さ約500メートル)を通過、岩峰鋭い山々が連なる。突然大きな街に入り、建物はどれも新しく、商店が並び品物も豊富で、こんなところにもきれいな街ができているのか。また山岳地帯を走っていると、山の高いところにも人家があって、大きな村には水力発電ダム、送電線が通り、小さな村は、山の急斜面を利用した水力発電があり、どこへも電気が確保されていて、丸い大きなポラポラアンテナや「中国移动通信公司」の看板の鉄塔アンテナが幾つも立っていて、テレビも携帯電話も普及しているのが分った。バスに乗っていた可愛い女の子が「私の民宿に泊まって」と話しかけて来て、良さんは「グラリ！」。バス停には優しそうな、お母さんが迎えに来ていてそのまま民宿へ。電気毛布付きベッドのツイン部屋(40元)

バス停で以前、良さんがチャーターしたタクシー運転手のルーさんに偶然出合って、これからのシャングリラ~徳欽往復や、他の案内で、4日間の交渉成立(1,000元)。早速、ナパ草原湖へ出かけた。想像を超える広大な地で、「たぶんシーズンなら高山植物が咲き乱れ、湖と野鳥類で綺麗だろうなあ~」と、乾期で乾しあがった地に立った(30元)。ヤクの放牧や、一部残った水辺では鶴の群れや鳥類がいた。

スツエリン寺院(松贊林寺)を見学。ネパールのゴンパより大きく、高く、広く色鮮やかで木造建築の凄さや寺内の仏神大像、極彩色の曼荼羅絵は神秘的で、修行僧が読経していて我が身が引き込まれそうになる。

* シャングリラ(香格里拉、標高3,300メートル)

チベット語で「心の中の日と月」「大いなる安楽」の意味。雪山がはえる渓谷・神秘のチベット寺院・森林と湖・麗しい草原・野鳥や羊・ヤクの群れ・我々が思い描いてきた理想の桃源郷の情景が、1993年アメリカの小説家ジェームス・ヒルトンの作品「失われた地平線」の中で描かれた地。このあたりの地域の風景が小説の記述とほぼ一致することでシャングリラ(中国名・迪鹿)と言う。

17時民宿に戻り、近くの小さな食堂で熱いワンタンなど食べた。店のおばさんや男客達が、私達を珍しがって「日本人か?この店に日本人が来たのは初めてだ」など筆談や手ぶりで談笑。その内に焼酎を勧められ、中国では断ったら失礼らしく飲んだがアルコール度が強すぎて飲めなかった。お互いに言葉が分からないままだったが、楽しいひと時だった。

1月4日(木)晴

シャングリラ --- (タクシー) --- フォードジン山(標高3,900メートル)登山 --- (タクシー) --- 白馬峠(標高4,300メートル) --- 徳欽市街ホテル(標高3,250メートル)

7時30分運転手ルーさんが迎えに来た。この地方の朝は寒い。7時30分頃までは暗くて、夜は19時30分頃まで明るい。昨日のおばさんの店で熱いうどんの朝食。炭火を足元に持ってきてくれた。

8時出発。市街を出ると山岳地帯になるが、舗装道路で快適。村を幾つか通り過ぎ、11時前に仏塔とタルチョー・小さな学校、幾つかの建物前に到着(2,800メートル)。ここからフォードジン山に登る。フォードジンとは「男の神様」の意味で、チベット仏教徒の信仰の山。どっしりした独立峰で、中国では少ない山頂まで登山道がついている。仏塔に10元のお布施と安全祈願してから、

ルーさんを残して11時出発。

ザレていて足元は「乾草無地」。陽射しは暖かいが、風は冷たく体感以上に気温は低い。途中道が不鮮明になったが、山頂部を目指して急坂を直登したので時間短縮にもなった。また尾根道に戻れてこれで山頂へ行ける。展望も良く目も慣れてきて踏み跡が鮮明に分ってきた。3,500メートルくらいから、ちょっと息があがってきた。3,700メートルくらいから、下からは見られなかった森に入った。太くて高い樹木もあり残雪もあった。「下がハゲで上に森」変な山や。やがてタルチョーが見え出して、森の中にいっぱいタルチョーに囲まれた仏塔があって、山頂らしい。展望はまったくなく、灯火が燃えていたので「誰がいるのか?」。周囲を歩くと大きな声が出て、男性が1人立っていた。笑顔で両手を広げて何やら言っているが「??」。たぶん「こんにちは!ようこそ」だろう?布袋からパンと、おかずを取り出して「食べなさい」と勧めるので、私達も行動食を色々あげると美味しそうに食べた。彼のパンはパサパサだがヨモギ入りで香ばしくて美味かったが、おかずはショウガと何かの炒めものでピリッとして美味かったが、ちょっと食べるのは勇気がいった。

彼とは言葉が分からないのに、笑いながら、食べながら、何かを話しながら、お互い、分かったようにうなずいて~不思議やなあ~。14時30分仏塔に手を合わせて下山しようとしたが、彼はチベット教式お祈りをしながら「仏塔の周りを3回廻ってお参りしろ」と、言っているのが分かった。良さんは、頭地礼拝で3回済ませたが、私は1回で勘弁してもらおうとしたが、真面目な顔で「ダメだ!あと2回お参りしろ」と言われた。周りは50メートル程だがタルチョーが低いので、中腰で廻らなければならないので息苦しかった。終わったところで、彼はやっと笑顔になった。

登って来た道を行こうとしたが、「こっちだ!」と先頭で歩いてくれた。彼は残雪のところでも何度滑って転んで笑った。森を抜け、また陽射しの明るい尾根道に出ると、遥かなる連峰の大パノラマとなった。楽しい下り道だった。16時着。彼は遠くに見える村まで帰ると言った。車で村まで送ろうと言ったが「下の道を行くから」と断ったので、素朴で人なつこい彼と別れた。再び、ルーさんの車に乗り徳欽へ向かった。途中「東竹林寺院」を見学。こんな高地に5階層の大建築物、本堂も凄いが、幾つもの、歴代高僧の黄金と極彩色に飾られた、六角形の棺と寺内の大仏神像と全面の曼陀羅絵は極楽浄土の実感がある。ルーさんは全部丁寧に礼拝していた。

さらに厳しい山岳道となり少しずつ登っているが、遥か下は上海へ抜ける長江が流れ、断崖絶壁で舗装道路が救いである。高度が上がると残雪が現れ路面が凍結してきた。「ヤバイなあ!」さらに登ると立ち往生しているトラック、枝や布を敷いて進もうとしているトラック、チェーンを巻く作業の運転手がいて、ますます不安に。路面凍結は日陰と北斜面だけだが、ガードコンクリートの無い所が多く「転落したら~終わり」、「引き返そうか?」、「下りはもっと危ない」。その内にハンドルを取られスリップ!「ああ!危ない!!!」。ルーさんは「大丈夫!私には神様がつかっているから」と、運転席前に貼られた仏様と曼陀羅絵を指差して読経しながら運転した。ルーさんの運転は確かに上手で「ああ!もう覚悟を決めた!」。難所は過ぎたようで日当たりの良い道をさらに登り、最標高4,300メートルの白馬峠に着いた。すぐ近くに、明日登る皇冠峰(4,900メートル)が夕陽に輝いていた。遠方には白馬雪山(5,350メートル)や鋭鋒が連なり、登る予定の最端の前方峰(5,100メートル)が緩やかな尾根を見せていた。

ここから道は少しずつ下る所で~突然のエンジン・ストップ。中国製のオンボロ・ワゴン車のエンジンのオーバーヒートで床下から水漏れも。「こんな所で夜更かしはゴメンやなあ!」気温は低く、エンジンを冷やして水を補給して車は動いたが、調子が悪く、いつまたストップするか分らない。陽が沈んで暗くなった。「徳欽はまだか~」その時、ルーさんが左を指差して「メイリー・シュエシャン(梅里雪山6,740メートル)だ!」と言った。太陽が山の裏側に沈んでしまっているため、岩壁

はあまり良く観えないが、メツモ(神女峰)から、シャワリング(五冠神)、主峰カワカブ(白い雪)、スグドンに至る大連峰がはっきりと観られた。「うわぁ～！物凄いなぁ！」が実感だった。

明日は昼間に、はっきりと観られるはずである。20時30分やっと徳欽の街に入り自動車修理店へ。向かいの小さな食堂で食事。寒いし腹も減ったし、女店主に何種類もの野菜やキノコ、豚・鳥肉を使って炒め料理を注文。5皿に盛られたチベット中華は、どれも美味くて、中央に練炭火鉢のテーブルは、冷めた料理の皿や、バター茶をのせると、また温まる。お腹がいっぱいになると「車の修理が早く終わらないか～」待つ時間が苦痛であった。女店主は8頭身以上の、けっこう美人で陽気でおしゃべり。手伝いの少女も顔を合わせると笑顔で可愛い。「私達の事で何か話している??」色々話しかけてくるが「分らない??」身振り手振りで～「どうも私達を誘っているみたい?そうや誘っている!」。「良さんは若い子がいいやろ」。「若すぎるよ」。「高田さんは店主?」。「私らをからかっているな?」。私の関西弁を真似たりして、お互い分らない会話で大笑い。店主は「服を脱ぐ」しぐさと、両手を合わせて頬に当てて「寝る?」両手を抱きしめて「アイラブユー!」と言ってまた大笑いした。「やっぱり誘っている?」店主は顔に化粧水をつけたし、また私に「アイラブユー」と両手を差し出してきた。少女は両手をたたいて大爆笑していた。退屈しのぎにはなった。エンジン音がしてやっと修理を終え、近くのホテルに入ったのは23時過ぎた(スイート部屋120元)

今日は長時間で色々あった中身の濃い1日だった。チベット州の陸路は、果てしなく遠い、奥深い、広いところだと感じた。

1月5日(金) 曇のち晴

徳欽市街 --- (タクシー) --- 明永村(梅里雪山公園、標高2,800メートル) --- 徳欽市街 --- (タクシー) --- シャングリラ古城區(旧市街) 民宿

明るくなってから起きたが、今朝は濃霧で街が霞み、厚い雲に覆われて山も見えない。香冠峰(4,900メートル)の登山を中止(登山道が無いので晴天が絶対条件)梅里雪山の末端氷河へのトレッキングに変更。明永村(梅里雪山公園)へ向かった。メコン川上流(ラオス、ベトナムに通じる)沿いに物凄い絶壁の山腹道をくねくねと走る。対岸に梅里雪山の姿はない。早く晴れることを祈りながら11時公園に着いた(63元)、1991年の京都大・中国山岳隊の遭難碑があった。山は雲の中。ルーさんが「この辺はいつも雲が出るよ14時頃なら晴れる」と。「どうするか?」これからの予定のことも考えながら公園内を散策していたが、雲が上がって、帰路には雄姿が観られることを期待して引き返すことにした。徳欽へ戻る道中少しずつ雲は上がって来ていたのだが～残念!

13時徳欽に戻り、母娘手作りの「蒸かし肉まん」を腹いっぱい食べた。街の人が次々買いに来て人気店。忙しく働き、娘さんの賢くそれで端正な美人顔が、今でも印象に残っている。滞在して皇冠峰登山か、梅里雪山トレか～、この地方の天候と道路の凍結を考えて～この先の道中、雲が晴れて梅里雪山が観られることを願って、シャングリラへ戻る決心をした。

13時30分徳欽を出発。雲が上がって来ていたが、昨夕の大連峰の再現は、とうとう観られなかった。白馬峠ではすっかり晴天になっていて、登る予定だった皇冠峰が目の前に。高度差約600メートルなのだが今からは登れない。白馬雪山の最端の前峰へも緩やかな尾根が～。また来て登りたい。この先の路面凍結は、ルーさんに「慎重・安全運転」の念押しと、日中陽光の時間だったので、往路ほどではなく無事通過。19時シャングリラに帰着してルーさんともお別れ。今日は朝の天候が悪く残念な気持ちも強かったが、絶壁の山岳道と凍結道を、オンボロ車と古タイヤとノーチエンで、無事に戻って来れたことに安堵して古城區の民宿に入った(80元)

夕食はちょっと豪華に、火鍋(寄せ鍋)、黒毛牛、野菜キノコ10種、ニンニク玉、生姜など2

人前だが5人分はあった。ビールが音を立てて喉を通った。今日はお祭りのようで、石敷の大広場で大勢の人が幾重もの輪になって民族舞踊を楽しんでいた。

1月6日(土)曇のち晴

シャングリラ --- (バス) --- 麗江古城區(旧市街)民宿

午前中シャングリラ古城區を散策。昨夜は暗くて余り分からなかったが、石敷道にチベット寺院と瓦家が続き古い歴史を感じた。11時高速バスで麗江へ向かった。市街を抜けると灰土色の粗末な家の村・埃っぽい小さな街・煙突の工場・変電所・道路工事・建築中のビル郡が続いた。15時麗江バスターミナルに到着。歩いて古城區へ。石敷道・柳の木・水路・瓦家屋が並び、玉龍雪山を仰ぐ。中心部名所の四方街・文昌宮・瓦家千軒を散策。電柱・電線がないので歴史情緒を満喫。オフシーズンだが、この辺りは人がいっぱい、欧米人や日本人はぜんぜん見かけず、中国・台湾・香港人のツアーばかりのようで、みんな声が大きくて賑やかに話していた。

良さんの夕食は、芋虫・イナゴのから揚げ・チベット風べた焼き・おかゆ・他にニンニク玉・赤唐辛子の酢漬。リカーショップを必死で探し青島ビール(5元)いっぱい買い込んで、石敷の狭い路地の「百歳坊」という古い建物の民宿に入った(ツイン部屋60元)

1月7日(日)晴

麗江 --- (タクシー) --- 玉龍雪山3,800メートル地点 --- (タクシー) --- 麗江古城區(旧市街)民宿

最初は「歴史の旧街」情緒を感じた古城區だったが、散策していると四方街の広場では、輪になってナシ族の民族踊りや、騎馬や獵人衣装の人が居て、記念撮影に応じていた。水路の石敷道では民族音楽が流れ、衣装も綺麗な若い女性達が踊っていた。大きなレストランや、土産物店前では女性達が呼び込み声。古風な建物内は全部レストランか、土産物物店で民家は1軒もない。中心部周辺は高級、次の周辺は中級、狭い路地は庶民級になっていることも分ってきた。「昔のままの路地」へも行ったが、確かに家並みは古そうだったが、やっぱり、土産店になっていた。むしろ狭い殺風景な路地の方が歴史中国を感じた。段々歩き慣れ見慣れてくると、ここはテーマパークで、日本で言えば映画村であった。夢のないことを書いてしまったが、中国もアメリカや日本に倣って、それ以上のテーマパークを作った様だ。大通りに出ると今度は、ツアーの客引きがわんさか声をかけてきた。それが皆んな女性で服装も良く綺麗な人が多かった。後で聞くと身綺麗にしてないと罰金とのこと。

「玉龍雪山ツアーへ・タクシー？」と可愛い少女声をかけてきた。英語も少々。乗り合いでないことを確かめて交渉成立(200元)。運転手は彼女のお姉さんだった。高速道路を快適に走り玉龍雪山が近づいて来て公園ゲートで入場料120元。やがて全景が見えてきた。雪は少ないが岩壁は荒々しく人を拒絶する雄姿だった。リフトに乗り換え(60元)。乗ってから分ったのだが、2人乗り、風防なく、本体はロープに取り付けてあるだけで安全装置もない旧式。物凄い高さで遅く感じ、風で揺れるのでパイプにしがみついて「うわあ~怖わあ!」。たいていの人は、びっくりするのではないかと。「もっと風が強くなったらリフトは止まるだろうなあ~その時は?」と、不安になった。

終点の3,800メートルから観た未踏峰の玉龍雪山は「とにかく凄い~!」。オフシーズンで展望所には私達以外誰もいなかった。全景を堪能して、また恐怖のリフトで降り、往路を引き返して麗江古城區へ戻った。可愛いらしい姉妹でこちらも安心してしたが、タクシー内で2人は「おしゃべり」しどうだった。

狭い路地の小さな食堂は、ちょっと汚いので衛生的には気がかり?でも、高級レストランの10

分の1ほどの価格で食べられる料理がある。揚げ物はちょっと敬遠だが、熱い煮物、炒め物はどれも美味かった。

1月8日(月)晴

麗江滞在 --- 新市街へ移動、ホテル

獅子山(3,900メートル)登山の予定だったが、往復の交通の確保が出来ず中止。古城区の散策も飽きたので歩いて新市街へ移動した。街の繁華街「七星街」に出てくると、日本の街中と変わらなかった。高いビルと、色んな商品を扱う店舗が並び、男女のファッションは日本と同じで、ユニクロを思い出した。時々背広の男性がドッコ(竹カゴ)をかついで歩いているのを見かけ「ここは中国やな」と感じた。「東北餃子王店」の焼き餃子は肉汁が「じゅ～」と出てきて絶品だった。今日は登山が出来なくなって街を散策して過ごしたが、贅沢な三ツ星ホテルに宿泊(240元)。久しぶりに、ゆっくり熱い湯のバスタブに入りビールをいっぱい飲んで、部屋にはミネラルウォーターの給湯器もありウイスキーの湯割りも楽しめた。酔っ払っていつの間にか寝てしまった。

1月9日(火)晴

麗江空港 --- 昆明空港 --- (タクシー) --- 昆明市街NPO 日本・雲南聯誼協会事務所 --- 昆明登山協会黒風会事務所

11時40分麗江空港フライト。12時20分昆明空港着。タクシーで市街NPO事務所を訪問。通訳依頼の為、事務局の林娜さんにあった。一見少女の様だったが、彼女は日本に10年留学して中国戻って10年になると。背が小さく可愛い人だったが年齢不詳?今日は、登山家の孔雲峰さんなどと夕食と交流の日。孔さに連絡が取れてひと安心。時間があるので昆明市街を散策。高層ビルが立ち並び、ここも日本の街中と変わらない。

超大型スーパーは、エスカレータが階段式でなく緩い傾斜の歩道式で、これも土地の広さの成せること。店内の商品は日本より豊富で格段に安価。食料品は食えるものは何でも売っていた。パナソニック37型液晶テレビが9,999元だった。中国の庶民には高い商品なんだろうが。

18時、高級中華レストランで、登山家の孔雲峰さん、登山写真家の黄さんなどと初対面。孔さんは迷彩の戦闘服を着ていてびっくりした。黒風会の制服とのことだった。通訳の林さんがいるのでいろいろ話が出来ると思っていたのが、最初からレストランの民族ショーで騒がしく観ないといけならしく、話が出来ず変な夕食会だった。私達を歓迎するつもりだったのだろうが~。

夕食後、黒風会登山事務所へ。ビル1階の立派な事務所だった。中に入ると、「登山交流熱烈歓迎」の幕と、大勢の人達(約30名)に拍手で迎えられてびっくりした。黒風会の山行や活動ビデオを観せて貰ったが、日本の登山スタイルと違って彼等は、サバイバル・アドベンチャーで、消防のレスキュー隊と銃を持たない軍隊のようだった。「だから迷彩戦闘服」が分った。

皆さんとの交流で情報を交換して分かった中国の登山事情は、

- 1) ハイキング(トレッキング)が全く一般化していない(山を趣味や健康志向の目的で登る意識がない)
- 2) 陸路が遠くて日時がかかり費用もかかる
- 3) ごく一部の山を除き登山道がない(軍事上の理由から登山用の地図がない)
- 4) 高所になるため、服装・装備が必要
- 5) 登山(協会)は国家管理が基本(孔さんなどが初めての民間登山の会)
- 6) 孔さんなどが登山ルートを探索・開拓して著書を出版している
- 7) 登山の楽しさを広げる活動を続けている

8) 最近ピクニックやキャンプを楽しむ人が増えてきた(有料キャンプ場も出来てきた)など。

質問に答えて日本の登山事情を紹介したが、中国の現状からは理解できない様だった。しかし、楽しい交流が出来た。その夜は黒風会2人の青年の護衛で事務所の2階に泊めてもらった。

1月10日(水)晴

黒風会事務所 --- (タクシー) --- 安寧市 --- (バス) --- 未成年犯罪者収容所の村 --- 黒風山
(標高2,850メートル、黒風谷) --- 黒風会事務所

孔雲峰さん、青年2人、通訳的林娜さんと、黒風山ハイキングに出かけた。8時タクシーで安寧市のバス停へ。2回バスに乗り換え、またタクシーに乗り換え、11時小さな村に着いた。未成年犯罪者の収容所の村で、林さんから「雲南でも知られていない場所」と説明された。大きな朝市があって多くの収容所員が制服で買い物をしていた。朝市前のレストランで昼食。テーブルいっぱいチベット中華が出たが、孔さんも青年もよく食べた。出発前に孔さんが「途中、沢に入るので登山靴が濡れる為、靴を買った方がいい」と言うので朝市で10元の運動靴を買った。「浅いの?」「今は水が少ない」。その時は「沢にはちょっと入るか渡る程度」に思っていたのが、後々とんでもないことになった。

朝市を通り少年院の敷地内を通り抜けて、林道をゆっくり登ること1時間30分。黒風山が近づいて来た。山道と同じ土で作ったオンボロの家屋、畑があり、豚、鶏がいて、おそらく自給自足生活。ここにも電気は通っていた。男性が出てきて私達に、小さな低い古い椅子を出してくれた。女性と子供も出て来て夫婦だろうが、服も髪の色も顔も、埃でこべこべ。行動食をあげると、彼は家から新しいタバコを持って来て私達に勧めたが「誰も吸わない」と断ったので、何かすまなそうにした。素朴な人柄を感じた。

前方の黒風山へ登るとばかり思っていたのに、どんどん下り「ここで靴を履き替え沢を下る」と言われた。「えっ!ここから沢下り?」、「約3時間?」晴天だが水は冷たく、最初は里山の浅い沢を歩いている感じで、ズボンが濡れないように慎重に歩いたが、次第に膝、腰までつかう様になり、脚も凍えそう。着替えも持っていないし「ドボン!したら終わり」。その内に「もうどうにでもなれ!」。けっこう長かった「鬼の水路」は岩壁狭く、見上げると天空は遥か彼方。下半身は凍えたが、開き直ってからは、沢を楽しんでいた。やっと終了点となり、広いキャンプ場へ出た。今日のコースも、孔さんらが、何度も歩いて探索して「ハイキングコースとして著書に紹介している」とのこと。日本人で歩いたのは私達が初めて。キャンプ場は晴天で暖かく、冷えていた身体が温まった。山道を登ったり下ったり、広いダム湖沿いの道を2時間余り、小さな村に着いたのは18時40分だった。

それにしても通訳的林さん、小さく細い身体で「こんなの初めて!」と言いながらも、よく歩いた。孔さんの携帯電話に東京の友人松山峰子(陳淋)さんから電話があり、良さんも話していたが、こんな所からでも通話出来ることが不思議だった。タクシーとバスを乗り継いでやっと昆明に着いた。チベット料理のレストランで最後の夜の晩餐会。ここも民族ショーで騒がしく話が出来なかった。その後「サウナ・ニュージャパン」を、そっくり持って来た様な豪華な、サウナに連れてもらって、しっかり身体を洗い流してすっきりした。事務所に戻り今夜も泊めてもらうことになった。孔雲峰さんともお別れだが、再会を約束した。2日間献身的なお世話になった。これは、良さんの友人松山峰子(陳淋)さんの計らいのお陰と感謝。松山さんが5月頃に「孔さんを日本に招く計画」をされていると聞き大変楽しみである。

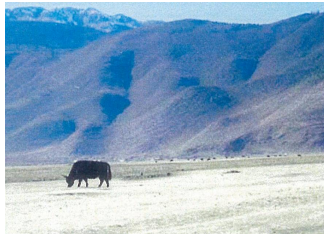
1月11日(木)晴

昆明空港 --- 関西空港

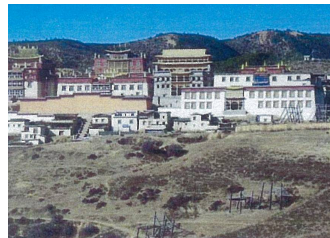
朝、事務所を出発前、黒風会の青年と筆談で感謝の気持ちを伝えると、彼は「日中友好・両国一致・我々友好登山」と書いた。今回の出会いが、孔さんや、青年や、黒風会の人達と、日本の誰かとの、登山交流友好のきっかけになれば良いなあ～と実感した。青年に見送られて今回の山旅は終わった。昆明空港9時30分フライト。14時10分関西空港に着いた。今回チベット地方へ行けて中国は6回目。大体は行って観てきた感じがしていたが、やっぱり奥が深い。5,000メートル級の山を確実に登って梅理雪山を観に、またチベット地方へ行きたい。

** 孔雲峰さん(1966年生)

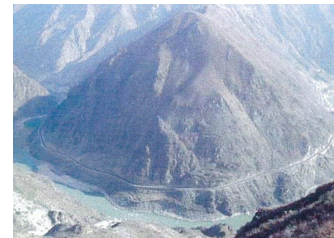
哲学士。執筆家で登山著書多数。登山家で登山探索・ルート開拓・普及活動。昆明登山協会黒風会創始者で代表。



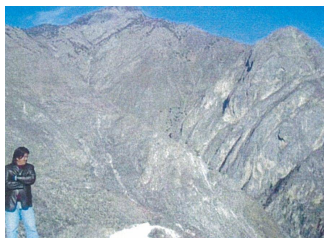
ナバ草原湖



スツエリン寺院
(松賛林寺)



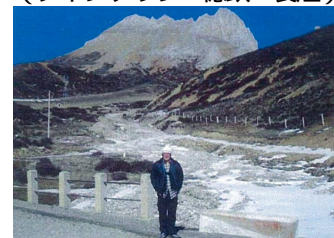
絶壁の山岳道
(シャングリラ～徳欽・長江)



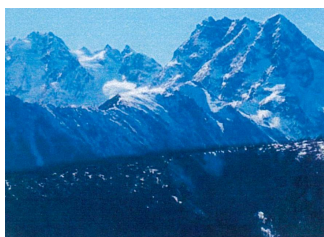
ブオードジン山(3,900m)



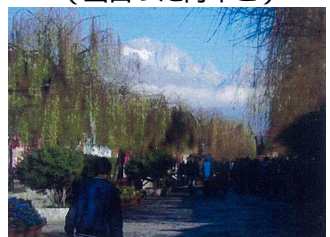
ブオードジン山頂
(出合った青年と)



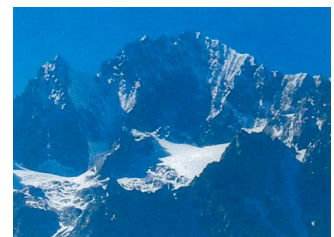
白馬峠・皇冠峰(4,900m)



白馬峠・白馬雪山(5,350m)



麗江古城區から玉龍雪山



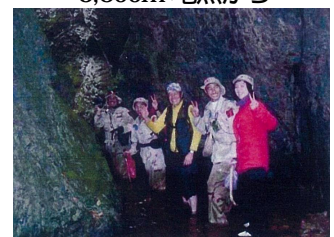
玉龍雪山(5,596m)
3,800m地点から



孔雲峰さん



交流(黒風会事務所)



黒風谷・鬼の水路